



特別
A12
5127
5



紅葉
花裏
葵

一葉抄 第三

紅葉賀

巻名も詞法りて号は但し巻よ
 紅葉賀とてははる月ハ
 紅葉目くはる月ハ紅葉目
 かりしとあり又花賀あまふ
 赤紅葉の賀とあり又紅葉賀者乃
 賀すことあり紅葉の名目法例
 といふことあり

いまは源氏十七巻の十月より大蔵
 の十月までのあり花賀は十月迄

とありぬ何等の名目しや

朱雀院の詔幸ハ

い詔幸ありて多岐門の詔幸ありしなり
らありて其れハ延長十六年三月七日
朱雀院より詔幸ありし皇里五十賀ニ
醍醐の寺門の時朱雀院よりハ寛平
は皇里の詔幸ありて五十詔幸ハ三月の
よりたかとい物位は十月詔幸のしり書
りしりといし巻りし一院とト申あり
列寛平詔幸門よりらりありて相違は
在位の時し一院前詔のより及らぬハ

寛平は皇里延長寺門前をく後々

までせぬなり

い詔幸のよりぬみ十賀といハ定り

らりありて院の詔幸といふし

朱雀院ハ三条朱雀院あり朱雀院

いしりありぬの寺門のりし一院

なりありい かんいといふし

らりし寺前とせざるは 詔幸ハ

詔幸御系よりいひて舞床のハ

ありし時のころハ内裏よりしり

て友直女師よりせざるは

源氏中のおとこはなまのひね 三いつし
とあつる八南文譜云い曲兼和流時古袖
言良峯女世朝長奉 初命作い舞
但詠小野首を初作
詠と八葉の中しなとふ事なり

詠曰

猿殿迎初殿 狛棲媚早年
剪花梅樹下 蝶燕盡梁邊

舞妓衣束

青女袍表袴 文小菱 蒲陶漆下襷

西大海浦 喜浦首 大海浦半臂

花のよらふれえ山なりり くらひ方なま
云巻のふつこの幸移る木のやうしん
及しと仲忠方ねと申よとと一仁壽殿女
流此彈正まよとそふん本よたとと云のこ
かまふいんこの志 かねてんといふ
名ひりつひこの中らうき移のりいよの
多うあたまらりらととりとととと佛の
後法のおよよあまらり
頻伽在卯於勝衆鳥云
あしとりきりく 糸乃ぬく吹立事
まよあのみゆ ちよとてんのまよ

かめいあや舟 唐のようひたり舟

りりうこま 唐杖 高麗杖

この坊つこの書 何と云ふしけり後

まのらふ 舞のたましき前

輪車 舞妓の席より舞あり

備前諸兵衛のたもとと

ふらふら葉のしり 二通りの紙

の目よりとらふ

二十人のいり 現代よ比下書相

交り二十人の数も後と不同りこの

一と三とありて其中して数木あり

すりり二十人のも横帯二人のり

二人はけい二人とと人なり

いひら吹かすの 舞妓のたのい

心のね風 たつたのり

つきお葉 舞妓のりよの三本

の枝よりやり又作りをよとらり

あふあふあは三三の葉とら

作り教透きり

たし将 二通りなり

りのありのり 舞よを取後平放云入

後と後相お部ふ二じり山公島三人入

のちのちやしらばまゝと頭昭次云々
あせて郭をとりあやのあやまゝと
あめこゝろくろりいにおすゝ
きまてやしらばまゝ

義香殿の 女侍とまゝ

其夜中將云云位と云々 延喜式に云

貞観以来皇朝有叙位之例

頭中云云下のついで 一評 云云位下なり

位をまては上下あり之位と云々

と下云々

と違ひなりと云々 次之位あり

次はよ管位の事いじり

首世 前代より

あはれ殿よはらと云々 ところ云々

しらの事ありと云々

源氏の事いじり前後の事いじり

まゝ見の事いじり 區怨友其人あり

かゝる事いじり

改訂 新しゆと云々人いじり

中納言若中格 云々女房あり

い三人の事いじり

父の事いじり 考ふ事いじり

由りてハ源氏の御事なり

とりのく 命婦^のまは御^のことし^のなり
母^の三月^のなり

廿日^のなり^の廿九日^の廿三日^の廿日^の
りりし^の御^の除服^のあり^の廿日^のなり

なり

又母^のなり^の御^の出^のなり^の廿日^のなり

ありて

是^の御^の母^のハ母^のあり^のハありて

り^の御^の母^のハ母^のあり^のハありて
り^の御^の母^のハ母^のあり^のハありて
り^の御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

年

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

御^の母^のハ母^のあり^のハありて

小御所と云朝賀の事よあはれ

清涼殿の前庭よ諸君拜す

りやあはれ 追催十二月つこもり鬼

よ事なり

名とくしゆめい 昔七名有玉帯い

あはれ形登通天す名も地ありしこ

内宴 三二之月中し清涼殿よ文人

のてし詩と作誦とありありあり主と并

扱柄赤女袍と美と保えよ信あり

引て後ハ縁のりあり

らんさ 各所ハ余賀せり

一院 此一院ハ宣平法皇よりんらなる或

又陽成院とてトよしや

とらんをさあり 源氏の密通ハ卯月

清門のゆかりハ三月よりりんハ

ていり

えん 友童のえんあり

よの中れさのりん付てせ 友童

のゆかりりしとくこやそれやハ

御命れりあり又源氏のゆかりや

よりありのハゆ懐妊乃りのゆあり

りりし

二月十日

ひだり月こゝろ

しげしげ

元祖のうらみ

清公のお母

ついでにうらみ

あゝあゝと泣きかた

の鬼をよこす

いふまゝ昔に

いふまゝの

うらみとて讀みかた

二やう人のまゝ

みかたをこの

うらみ

うらみ

同断を

うらみ

うらみ

うらみの事

うらみの事

命ぬ

うらみ

うらみ

源氏

うらみの事

うらみ

うらみ

うらみ

うらみ

うらみ

うらみ

ありきり女官なり

みりのすけ

源曲侍

歩らきの人

美人和記才十云 歩髪

警事侍長之間撰堪事之人依之例

皆着當冬袍

謂之御掛と歩髪冬袍
歩く納美人而

と棗歩りしり歩ひんよさう人ハ世乃

縮の巫衣と着て能作すかと歩らしん此

人と云うりい事行不審云々又こしら

きこハ縮の巫衣と云た云

かゝり

夏の扇なりそりりのも

ねと似せらり

しりまういけり

扇なりしゆ髪のお

りありしゆかぬし扇のらとる人よ

似あぬなり

めりらたり

え

歩りらとらとらや

枯の下草なり

老のまらしあぢせあ

りきてせも心んたるや大あは

の枯れ下草ゆいぬまし約せとらあ

まら人なり

枯らなれと

陰せりまひりいなりな

大草子のりらな夏の陰ハ菰冬は

せりらららとらハ扇の縮のら

よのねはひらりし

藤よけ八人やうめん 花 約はひくのみ八條

典侍のしひさきく男とまりのうらふは讀ゆり

まじりか物法をも思ひゆめ

百景 黒髪よ白くまきりしるまきりしる物

中の八景 後上神女

しーねと 昔より昔形く七格拒方ぬり

カよふぬしりくま

うハ清ららぬまき 花を七条説や何

あつぬ人ゆりぬハ 中くぬ人まき

あつぬ人ゆりぬハ 中くぬ人まき

甲ん祀るんやうりてしひらや

ふまけきハ根つぬりありげんやま

まきのじや 中より根津氏の君

ハ公のむくしりり

おこのこせまのねは似つぬとこ

かりぬ物うき 友つ下の清事し

温明殿 花 中七重北東の方よ有殿よ

そ内侍取のまきまんぬり

あり作りまじりやままき

山のこぬのほのり作りりや

らりりやた作りりやい可しん

はれしとせんなりやとれあり一宇利多
つ天仁や良いくなりや宇利くひまてよ

催ふまゝ 家

山溪のいぬはくらのうりはかりきひて
後ろくあしりけり 家のみとて
しあふ平なりはひてのじとていつるん
とけり

かくらうしありせん

河内ちくせん公文

春といひらん人いあり早文若年より

て司子相如よすはのてとて白久吟と

まのよ作しりまりの気色し女の歌

川相あましとまは但必歌の老あて

ちりつらつとや鄂列よみきんと八樂

ま鴨鵝列し由て隣船よ女の哥し者

すかし用りて年十七八の女まはと源内

ののつとくまのあまのこくしてく

まふまふ女まこやありきんあしと

はりや 文集才十三巻

あつまよとのひやふ ありまの母や

のあまよあまのひよまのまのまのひ

のをもんまのまのまのまのまのひ

しそ其まはれらめくひのひてき

ませうまや入つて 催ふ系律

まよさしきつり ころころり 持て

人妻のあまじつり 修理なまじつ

と聞かたてまりりまや人妻とま聞て

ありありありまやとま阿とまま

とま西下とままままのあまりとま

まこのつとや

すまじつ 修理なまじつ

くまのつとま 修理なまじつ

くまのつとまありけつとまりりまの

まのつとまりり

あまのつとまりり 从表とつとまりり

つとまりり 修理なまじつ

まよさしきつり ころころり

つとまりり

まよさしきつり ころころり 現れし書

まよさしきつり ころころり

まよさしきつり ころころり

まよさしきつり ころころり

の夜下ひきんまよさしきつり

まよさしきつり

まよさしきつり ころころり

そしつてしるすのくちをたふとくちをたふり
まわらじりるこしけりよよ安り

あつひようやまぬとまり保氏と成若
そ女よふのこまぬうと云り

そとあつとん ちれての後ろ世しと相

の庭もあつひまりぬしやし

ゆえりのさまや 乱あつとんりり

あつとら一はよふハ せきん然と内

ゆのりりくし

常ハ中將れりけり秋津連衣しハ女少一

^花 馳連衣人首ハ連衣のこまと常し用女

かまりとの号とちとの法常ハ法引な

くまこまこ用如夏の連衣ハ二藍或を

田と年しりて着ん源氏ハ宰相中將

そ二藍の女より双中將ハこままり

とまこ官ひきうひりしこま二藍の

直衣と着用号し官とこまハ宿徳よ

多分用官此ひまハまろと女と用り

ひり御まこよ源氏の常とこま二藍

りり常のこありしと双中將ハこま二藍

り連ハ家持連衣しハ女ありしと云

りり 細流云 鱗袖

中へいかにやゆよと

花 石河のこまきり

お常とそとていつらいつらいつらいつら

うらりの中へあええええ 催すま品
石川

又ありまらの道のまきりりり常陸常此か

いしりやあらんまゆよとあまの常

おつしはせのり但常陸常のかしと

まののまきりとのまきりといはまきり

りと同じゆり中おの常八田といはまきり

りまきり常は八花田の常このまきり

まきり石河のこまきり人よまきり

まきりまきりあてえゆり別中将

のせきしききしきしきしきしきしきしき

やまきりの中このまきり石川の曲きり

まきりまきりまきり

りまきりまきり 殿上まきり

まきりまきり

ゆきまきりまきりまきりまきり

花 次中将貫首よまきりて宣下まきり

まきりまきりまきりまきり貫首と

まきりまきりまきり

まきりまきりまきり 花 石河のこまきり

まきりまきりまきりまきり

御一からしてとてとるくしん

とこれおしりり おうこのそとせおしりり名

そり川いさくさくして流るしんを

とくさく マキんの付せらあゆり終よ

せんとりよらんりり

七月よりおぬね 友つどの女流秋ま

みくらあままふりり或なり八月

あしあり

源氏のあやわけとてとるぬすしきぬハ

冷泉院の外尺よ開白くしとぬくハ

人よりとて源姓よりまひつこのま

ぶらうぬ

流しゆらと思をよして 元 中まはれ

啓りハ風輦ハのさくしりてあり又

底のいしげの車ふ乗時とあり供奉

の人乃お務きのりゆしりてつるあり

ニ條は名の氏神よまうしてぬげらふ

このまつさよらあひるおち原やと

ういのおとせりあつていしり

とくろとてきとてりん すとらんりり

ふりんぬとてふらとてとるり

ういりてあつてとてあつて

しんせきあふりしうふ 山の園ハるま
の侍事くさるぬハりくし

花宴

春名六南殿の撰花宴ありし知葉
其の次年の暮より涼氏君十九氣
花宴例撰誠天皇弘仁三年二月
神泉苑に花宴是初り
南殿花宴例村上天皇康保二年乙
月花宴有花宴例は是度この例
と意用て此書に書ゆ皆探韻作
流絶あり南殿の撰と流絶と宴
と八清涼殿よとを流ととりて
りしゆの流一花名を明り

石書家の所居

凡ハ春を来り有ハ

石のなりし

目しと晴て

時節の来中の子思

なりて見ゆし

其道のこ

待と作らふよくの事なり

ふんぬん

顔字と一字はふりえて

作り其作法は先題と儒者の言て後

小古詩と一字はあてさるるなり待の

名や或時しをさるる句と用なり庭上

とく儒文書はらとあてとく中

やおやりて主上の詩のめし顔字と二

よりて身が穀ふかりとんと一字は用

まよより故まより徳長ハ各一字と探

用て作者十人のまハ言詩二句と一字

つ顔りまつり十人の時ハ七言三句

と用しや志顔の字とらなり凡よ懐紙

習作云

春日同賦書采現桜花各一字應スル

製詩探符 其字 必以下書之云々 凡也者

宰相中将書と云々 字はなれり也

顔字と探得てハ各其より一字と官姓名

何の字と探得てハ各其より一字と官姓名

寛永は源氏君のまき字とさうりありあめりぬ
ありおの幸なり事なりとあひくら事
なりへしつらひ進退お美のりしつ
ふんはよりのとらてきなり

とくしつらぬちのめなり

人のとくちのつらむく目くらぬれ

とくち鼻れとらつらしと見ゆなり

年光ありとせとせなり 印者の跡て

臆しとぬらうらも替も体つむ

いぶりのとくしつなり

かくしつらぬちのめなり

花宴よハ涉程とらりして舞玉ハ

但天曆三年三月十一日二重院陽成院のりし

花宴同月十二日内宴仁孝の殿花宴

各有舞樂即奏美寫轉又比下

伶人よりして殿上の舞ハリとい也

彼のつらひ面れとあはと藍より書

書りしありなり

善乃字とつらやしよまの 春寫時

花宴ありぬらひを樂なり一各ハ天長

寛永の系と云くつらとくしつなり

此まのめなり

てらさしのみやうくさくさるぬく大方は
所まじりハかくせりよりのせあぬしと
ありぬら体むよくむ却て風々
いんせうまうはくとさうしり

流ら乃らりせんこと 弟子の行こ

ふせうふよえり 友つ下の流らり

すり女房の命ぬりし事なり

三のくら 弘徽殿は南少しそぬりたる

席ありてと細敷と云らるるの産

三ありむりおとのたろりりりて字ハ

あしむし又らるるたはらあひり

あかすりときささハリ法たむあ
れえりし

かあうあく世中のあやまら 女りし

あかん方よく用らるしと云らり

又男あやまらするりのくのんすん

まとも源氏と来のあやまら八思

はくまうしりし

あおろりし 大に千里とくあま

きいあかき書くあらり

いしはらりしあ くらうしりし

りよらりし

らぬおやうにてハハくは

いふは

あつた米のあつたれと云ふも いま

は

いふは

まらへま人はゆかたも

のり候はあつたれと云ふも

いふは

まよふ世はやうては

まの原まては

は

は

ま

は

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

てさうしき事とありよあし
みたりしとらぬゆゑにのぼり
かゝんと降しぬりし後り
いふさうしき事とありよあし
かゝると降しぬりし後り
いふさうしき事とありよあし
いふさうしき事とありよあし
いふさうしき事とありよあし
いふさうしき事とありよあし
いふさうしき事とありよあし

東坡詩云 摸扇惟逢春夢婆
婆の物とりんらうしき事とありよあし

あしき

源氏の詩才堂きつ事とい
まへにさうしき事とありよあし
てさうしき事とありよあし

すまのぬき君 あいさぬこりしきぬき
中しき事とありよあし
ぬかりそれしき事とありよあし
とさうしき事とありよあし
又のぬき人ハさうしき事とありよあし
ふとさうしき事とありよあし

六名 勝月承ハ列とあし

まのうら海への詩ありらむ 大右衛門

あめり夢とやうしのかさのたぐはくはるん
源氏の詩くし吾もはやくを列せ給

みりかきこり

たぐまりありや ともは祖れんけり

後宴は事 花宴のこえんあり

花 後宴し云名目ハ男踏之れ後二三

月しら乃結ありやとりてとてどむ

あしそりたりゆり

はるのせやわらん 花宴は是あり

お良の娘らのまじり多しう海あり

とゆはりてとてしりりり人やとて

とせとやあり

詩ましりまてぬひたつれい 源氏

のここの詩前よりりり出給は

惟光りてのりきく

お乃らん 中堂は陣ハ玄禪門の方こ

口位打れた中弁あり 右衛門息あり

ら、ゆり、うし開てししり 源氏

ひんとしてしてさハとんみん

姫君いつとてしりらん 上のししり

はくしりりありとありとあり

雲とこのうきもゆきしゆりあり

梅の月くさね 檜扇乃あや三枚はく

とさくこのうきやうしてはくきてはくの

糸うしてうらしてはくしてあやの結しじを

ひもろりまねと列のいついじりまね

ぬきの扇とらふぬ枚とゆくのあり

梅れうとやうハゆして白あうとせう

ありここのふんとハ雲うしてこくぬと

ゆりありまてむきよハ月也

めりまぬれとせうのうら 帯のおと

とせういりうらうらうらうらうらうらうら

乃づつひ月もへよ事あり

世しうぬくらとせれ いせれうらとせ

かえぬと云くことと人言とりて

昔も信正有明乃月れ初まなり

めしう野寺乃権ハ用へりげいあり

てしんぬらうり源氏とハ記もあり

そりりてしむよあり後成つて源

氏見ゆらんやしんハを念れりといり

又もの実春ハとらて教たりまこと

このまかり

わいのゆきしりは 双葉のまかり

やううまぬり水ハうて 貫河は奇也

おぼくぬのの中しらすとあむおつろとく
らうのししより御花苑りん

たぢくこの事とりのおあつろいりり
ましてらゆく春し 申して行くの舞

おはまーそとさうあつ世の面目ひらして
とあつやけはあつ方ーたりてのおあつこ

辨中将 左将息或が中将弁とあり

ぬんーや

ゆりおとぬとさういひ 弘徽殿の事あり

らうらら ^も 二条のやとあつあつらの抱

あつて其結は友氣のあせつとーや

ゆりおつりんやとさういひ

^も 右今あつ外のらりりん 後ろさうまーと

あつあつよとあつとあつらりら

おりさうとあつとあつらりら

あつあつとあつとあつらりら

あつあつとあつとあつらりら

あつあつとあつとあつらりら

あつあつとあつとあつらりら

あつあつとあつとあつらりら

あつあつとあつとあつらりら

あつあつとあつとあつらりら

口ゆりりち方源氏なりと一見しては哥
のいももんあつらひまはんとよえては市
本帳と用ひてやうとらんてはいつと魚
ぬのいひらりり人のいももん付
まろりり

新く作り 霞殿りり下殿字はゆりり
まろりのゆりりの日 弘徽殿のゆりり
女まろりのゆりり着あちの家の
あつらひりり

ちのゆりりゆりりゆりりゆりり
ちのゆりりゆりりゆりりゆりり

ゆりりゆりりゆりりゆりり
ゆりりゆりりゆりりゆりり

女ゆりりゆりりゆりりゆりり
ゆりりゆりりゆりりゆりり
ゆりりゆりりゆりりゆりり
ゆりりゆりりゆりりゆりり

ゆりりゆりりゆりりゆりり
ゆりりゆりりゆりりゆりり
ゆりりゆりりゆりりゆりり
ゆりりゆりりゆりりゆりり

裳末として着すありありのきよき下重
くの袴有りての袴と申すなりとて
かゝのきよき白の袴のきよき袴
あつてつひあつてあり

ふりしりく も あまふと三層の直衣下
小着下褌衣隨不常の事なり
と素袍下褌衣と云ふなりとハ布袴と云
ふ下用之事なり直衣布袴ハ依り依
人よりなり下重

あつてはるあつてはるなり
も 袴末としてつひあつてはるあつてはる

うまハあつてはるなりとてつひあつてはる
や帯の袖有り指貫と着し袴引ハよき
帯の事なり直衣有り袴と云ふハよき
りふせとてとてつひあつてはるなり
あつてはるなりとてつひあつてはるなり
王の字あり大人のすゝなりとてつひあつてはる
又直衣姿と別ち着せしむるなり

袖のりしあつてはるなりとてつひあつてはる
内裏として袴有りては袴と申すなり
りてはるなりとてつひあつてはるなり
はるなりとてつひあつてはるなり

のりりしは友を重くおぼしむるはまなり

あさくしつゆ とうぬこあ祥とまを昇記

いしよまよふらげしむくせぬもの

伊勢物語のまむれとまのくろく人共

こハ葉友のれとまのりつらハ忠仁と

良房乃友氏のらつくと思ふてしめり中

詞しんてふりたよし二条の中くと忠

仁らしむるてしむくせぬハ

の源氏の勢つるも友のむよしむら詞

ようぬ人ともやしむるゆりハらゆりま

にきてんのは服の女一ま女之まな

とハ友源氏の姉妹とましまんれ

ひのいんきんともあしゆりハ

いらちまとも女房とありとあり

あつむりしとま とういんてん

らつらぬり

りし有あし事りまともんてり

まゆはまて とうきらまよ

うかぬりやんぬりりくまは

みゆりや

あまふらまてかつらぬん

源氏右衛門のつとんまめまら

しんを何れにまゝ人よ帯とさして
ついでにいとすうとさあふと麻衣をわけて
とひひくぬり麻のこもをさしてつくはこ
あしと様之あつと海とこ能といふ六ひぬ
人なりし むいんまくとちぬ人ハ源氏君
いひのちまりぬつろそしやうくあひて
らさうとさうに海とこ中とさうあつと
いひのちまてさつとすうらぬくさうい
はこつとさうかりて 麻衣をさして人
つやまてさうしてさうらひくもさうい
ぬりあつとれさうらひ源氏君ハいひ

まゝあつとあひぬとさうさうよりぬて

梓らりつとせはり ち乃結れ日りまそあ
つらりぬとせはり

ふりつとぬとせは 深くらへ入あつと
つとせあつとさうらまてあり三風
ホ日あつと打れとやうくさうらり月を
ひりつと

あれまわつ む其天一人ハあつと
まもれぬとあつと六あつとあつと
らぬとさうさう又あつとさうら
ぬとさうさうさうさうのらつと

ろくろくはくはくろくろくろく源氏の性
くし入ありろくしき善悪と批判しぬ
まふりりき

葵

卷名ハ哥ヨリテ号ト人ノことせれ
葵少ハと源内侍ありりか葵
の冬此事と論しすり故に此卷ハ源
氏君二十一歳よりホニ殿までの事
也富あまハ十九歳のよりありぬ卷
向り朱崔院より少位と讓りて少
而位大嘗會ホ事ありし

世中よりて 桐壺少門位より
事あり

少男のやむしりきとそよりや

源氏若方將し侍給りこのこと果
り凡そいふなり

秋より此より人の 友臺のりなり
と人のやうあくうひ中りまは

侍位より長く侍りてぬるは友

臺とてひれりまはなり

と名ハ 弘徽殿白方名ましなり

きりしうふ人なり 内裏はく弘徽殿

ふあつとよ人を中るをぬとなり

との侍るこまうとめてなり

秋り井の侍門のぬりなり

ぬとやう乃 記者のこし葉なり周及

事のやういふなり

秋より井ぬひなりハ 秋好れぬるこ

秋まハ侍代より一なまをくせ給とこ

朱雀院侍位ふ付を給て秋宮下宮

ましと乃くし世まより一年とぬの

年ぬぬまよりなりとふ下之ありと

より三年めし下給候なり

人のふめららまきなりハ 相臺の

侍門の源氏よりし給侍親のなり

養よりと侍息の物なりなりなり

一よ二夜め此後と云り其れハ初夜乃
後ハ初使参儀一人供を以て二番御し
ハ初夜中初参儀以下あまの供を
以て延長式ありてあり是て十二人乃
初使より是と教之りてハソリ保氏大
おハ参儀二人の中より一しき直に参儀
しつハ二夜の禊と云ひなり初夜の
ちつハの事ハいまだり及くゆへ
きむ多しくり

大ま 参との母ふし 一祿 ぬとあつたし大

のましくまかりり

飯よめく所しゆはをたて、 車之りりり

けいふるあり

あゝ乃とて一訓きりり けれりかふたつらへ

下巻のゆへ も 女房此乃とハ八葉の車し

も下はとてとてりりり

も乃すまうらと も かつゆしとてりりり

ハ下仕まてとてりりり も 見えハ童

女のまらおりり

しりり屋つまら 然やつしゆりり

歩せん も 比下のお強し

くま も 家家し も 字んりんりり

とらふらふらり

人あまの 出車とりよ云方より死を

て其人よりあまふれり人始と名付え

うらり車しうし 爰のうらハクも

のぬやうれと葉有りうらハ掃とく

は可しやま

らのかまふし らのかふいのらふ

ふ物とあてまりあふ親とくしん

れきと引てらるらハまは而の方とハ

り始ありまをりさく親とくしん

まをぬはまぬやと世りてハ

し始あり源氏の何となく見届りぬ

方をぬしりや

下巻のよとふれやぬふりれ

源氏の清経んし道ちるらと其り

親とくしん何の 清経而の源氏

とハハの月とくとも源氏ハとせり

はしめり

めとあやたふしり 月とあやハ

うき文とんかやうちんらり

ち將の清りのよとん 近衛將監將

常府生と一人はりしの一海ては

ゆきよりより矢とせり比下七葉
あり穢より隨所とけり八帝其る
美人のうらと八殿との美人のお世より
うまと具す事八例りいふるこ又其ま
の付八たをまお世お書八中陳は信ま
すりしりて紅乃一頁よめ一信と事
もれとぬりいす事一の難依に別
小程ろくし 信 信云い物後の高
言の辨とくしし信氏ちおとりめん
ふめいせい書らりりし
はらうそく 信 首亦らあ一つこらめ

三より夜きく中ゆひらり
かこめめ 信 このとらうとつてゆそ
くおきよめたらり
もはけりて 信 よと合くゆもはけり
ひくとと道おあしれをよとわう
車りしりのまとも人のおらる
はりのとほうと思ふ
改新島ま 信 批園宮
神をいめとらうとのおと 信 お葉
かろ奏しる殿殿女侍のおらるはら
たりてははははとがのてあわく

あひまきうらんりり

娘君はうしはるきほりぬ歩んよくの

権の娘君は中より源氏のうしはる

小園はゆき娘君の歩んよのりけりり

るし源氏のめてささはつしきいて

とさしてはるけりぬおてりゆめぬん

人よりうそかくきりりしはるひきと

とさよ事りりりりりりりりりりり

ふりりりりりりりりりりりりりり

ハ権の貞女りりりりりりりりり

のめりりりりりりりりりりりりり

たぢりぬ

の家風とのぬり

新まのまのりりりりりりりりり

妻の目い入ぬよとらるるのありてま

ぬりりの二條系終まよゆりりりり

うのの人のうの袴 む 童女ハ晴の時ハ

打袴の上よ表袴とゆりりりりりり

窠よ表よりりの帯ハ上れりりりり

もしは

らんりりりりりりりりりりりりり

のけの具りりりりりりりりりりり

子ねりりりりりりりりりりりりり

り

ふひらきいさつらん 凡らむの
とハ源氏の侍のらあめりさとの
アヤとやうしやいりひ新なり

馬場の中へ じ殿屋とてた右のさ場よ

あり八月廿騎射の時中やねの者屋す
可りりお花の条ち田の時ハ陣とせ
一條といふことりてたをれや
川とほりり

舟れつみゆりて 捨扇のうとねり

りややとほりれ

そり屋人のつせり 葵の逢と云ひ

とあれうらあな 引子未見下敷

うさげらあぬよ 源内ゆき

し事ハ八十氏人あハあまの
逢ぬ人よと見ゆ

く屋くもさうあり 又内ゆき

人ぬのハあたのめりさやう
ゆきり白くあひハ人ぬの
はまれ名なり

いしまかぬさあさいぬ

くゆなき 源内ゆき

さうあひハえんりぬあさいぬ

こらしくく源氏のゆめをいへば源氏
いほりしる人こそよりのせうりつ
つやうし行をひくぬ人い又人若あいの
りあつるよほくまれてこそ業よくい
らへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを

物すあまの 伊勢の海よほりすあま
のうはたしや公目くくはのつね
ぬきぬきとらんをく 源氏よりあま

可くあまのいへんをいへんを

いへんをいへんをいへんをいへんを

あてあまのいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを

いへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを

いへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを

いへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを
いへんをいへんをいへんをいへんを

まわていりり

院よりやあそふい 相違は街門の事へ

うらみのいさまでやゆはしうりりり

人のまのいじよよあはれり見んぬハ

あーまのりりり

まのほ街物思のふまよ 街思のい

ふのいほりぬくぬ終はき 神事

ふとてあはれ行く

まらとげぬのふりり まのい

ふのいふまあはらりり

いふふふふふふふふふふふ

まらと接盤のふりり

船ぬりふいらりりり ちんハ泥とひら

とらふいふふふふふふふふふ

ちんらりらららららららららら

ちんらららららららららららら

ちんらららららららららららら

ちんらららららららららららら

山乃井水せらららららららら

あくら波そのあてげらばれハ袖乃

のりこの井水せららららららら

あくらららららららららららら

いふもやも有世哉

源氏忠清の申

ありの感

あふもや人のゆりま

源氏の忠清の申

あふもや人のゆりまをいふもや人のゆりま

のまらむしり

いづらひもや人のゆりまをいふもや人のゆりま

えさせぬ

あつていりてゆりまを

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

あつていりてゆりまをいふもや人のゆりま

のありて河ありかき我れ新院の御ま
ハ雲蹄しありありまよとのたまひよ六
いせ新まのりあり

二海山の侍もく 新ま徳可い入給と

奔とて也又新まよ入給とんとて

也東川也く侍御のりあり是と二

夜のれもくしよりの又群勢の時乃

侍御ハ何とありあり

ま入 新ま七言人なりし

海の二海くらよと 夢とよ雲乃の

なりて源氏然うらゆりなり

いふはよとあり

いふのちもくしよく源達瀬ハ 永世と

夫婦ハ此めりをさすなり

海に終り有中ハありて也あはれハ

ゆや子のらふりハ一世といひあり

くまともくしよくらめらる詞あり

物よよ人乃御井ハけしあくら物とん

^{後格}わゆりハはの雲と我力ありあくら

是よけり玉とくらん新まかふよりの

款しひをり月あり 玉の出めり

結つしかりありあはハりありじよひと

このころや
のらたきまへりてころりし

浴櫃 中世のりりたし

のらたきまへりてころりし

産以後の事とせたりし

まぬ所なりしとせの事なり

之ヶ来ぬヶ夜なりし事なり

うらゝのう 二枚の襦し三ヶけし屋

浴巾なり 髪ありきなり

りし浴ふもなりせまゆり

源氏と浴ふもりのゆきせし

らゝあのみきりなりし 左大臣

らゝの事もなりしけり

盈ぐ飲理とて夢との事出来

ありりし世物ゆかりなり

せえりありし

あまりりくむしてりし

せゝぬまなり ちまの夢とて

まひりしものやうありし

こゝハまりしものや 徳とて

とよむハすまりしものなり

こゝの人のあゝなりし

ほのぼのハハめろくめで 暮らしの深代
又見始まりき先表ひり

秋のつらさの 春の除目と懸る

とくま喜ハむと外官とて外
の守介撮目までと任そゆねよ
あつめとつらさの秋の除目
京官とつらと秋の除目
たど任そと故より是とつらさの
つらさの但喜のとつらさの
あつめとつらさの秋の除目
たど任そと故より是とつらさの

物名や除目ハ言武天皇元年

始ま ぬあま

君さしや 古き身さし

いぬらのうと始り有て

芳よりて官と里うあれ

物り世あめり ありたつらさ

片枕よりささ始り 死人ハ枕と

あつめありやま

大将殿ハ解き事しと成りて

帝と世成憂物しとつらさ

つらさのつらさのつらさ

まねしきせせよしりて まうしんを

其後を公八日しりかへ

そりし野し野てしきしり子 夢との

死去八十四日永有り寝ハホる白く

ろうじしとけしと終 遺骨此より

人日とりあましく見始るぬりりれハ

夕ふの事りりし

八月ホる白れめり行進ハ元此より

行りかきゑもあうし世とよ別

あまひし時この永思るりやひ出

しぬりあり

乃のりめり糖ハうれし 此代の指

候しあまふたり

世法へてあししくしりきおし

夢と乃ららるりりせうらとひと

まのしきさまぬりしりり

丹のりけり 丹量此服夜よりふし

先らハらるりうとて臥り

かきりあまハらんすん夜 限ありとハ

物忘令すしのさめりあまのこ

ゆくと潔すしり世とよ別けり

時い夜あまらるりりり

法界之味普賢大士 普賢ハ法界に

あつり而他と云味とん 観音ハ慈悲三
味し持し始りし一三十七尊一衆合衆

普賢延命大願菩薩等とあり

りありとのよ乃 じとんいしくかゝるもの

子さしりりまは何しとのよの草紙
つまゆー後撰之あり

るは思くよあり奇りり

神の上れ玉乃 女不不のうあま

いりうまき流路よゆり 嚴重の御紙

まよと思ひまよの一世と 源氏の流

ありりうらふたりとハク奪れりえ

時とあまと けとあま秋やん

ふりていりるハ承えむよりまのい

ガありんたろれ 吹とまハカとと

あり秋風と女りさゆとるひられ

河海よハい奇ありいれ乃そのよて

くし通し表のほらんやありらふ

カよさしけ株のさ承風やとて教

りりくきりやとま

あまあしれとあり ひけりたる神は

うさあはあひの紙 花甲しまけ乃

まゝまゝなり服者のくつこのめ
りりあまれ日ぬりりして

同じぬりハぬり一とくしんや

人のひひハさよよつこのまら

やうりハ同じぬりり文の約し

大の世気氣と聞と ありさくさく

とこのさふ そひぬりもいさ

ゆひさうひぬりともさうにさ

あさうひぬりぬり

さよあさうひぬりけと 文のささ

とまが力とほりぬり ぬり

あんとハまはさのぬりささ

ぬりぬりぬりのぬりぬり下のぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

服者の方りの文りぬりハさ

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

先防の後相帯此内しありまゝとせん
このぬまのしりぎり

野乃まのゆらゆらひ 法司より御まゝ
いしぬまのしりぎり

五月をいりりありまゝ 月を色のまゝ
三位中将 次中おりの三位の事

いしぬまのしりぎり
ゆしあり
祖母殿と八年の事

ぬまのしりぎりぬまのしりぎり
まゝのぬまの親りしりぎり

か乃いしぬまのぬまのしりぎり格のし

ま稿まゝよ常陸まゝとていしぬまのしりぎり

み次中おの源氏と見ありしりぎり
まゝのしりぎり秋のしりぎり

はまのしりの後期し次中おの源氏
しりぎりしりぎりしりぎり

しりぎりしりぎりしりぎり
せしりぎりしりぎりしりぎり

時ぬらりて 又一限りの上の御まゝ
のしりぎりしりぎりしりぎり

中お若あの色のしりぎりしりぎり
夜しりぎり 中お若あ姉妹の服三月

由井のり 鈍衣直衣平箔冬練有暮
夏生衣暮指貫ハ夏冬同鈍衣ハ後花
あくらげりりうひうひハ十月の更衣
の出し衣とくくあどまり

行々 男々き 雄字

叶ぬささくぬれり さりともむし

ぬとりりやうやめしせん

度令樓中初見時武富青柳以腰
又相逢相矢雨如夢為雨 為雲今

不知劉禹錫婦ニヨクシテ作詩

元也らんや ちしけりよすくすく

行はくうひてりゆの入部とらん

りささくりぬし花名の玩用

しき又浮舟もいしとあり

うれはとすくしあさ屋ぬり

将服三月りり更衣とみぬるあり

濃りかみりのゆきとあり

知のは屋やぬり 将服ぬの箔と用

り例あり見む鳥 下籠の事と見

えぬり但箔入りぬり

むしり事ぬやうなる哉 中將のい

ちしこのりりれとあり

月一人の面よりありし いろは表あり

結句未録情ありき

括あり下葉中し 此系勝勝へき

^{一解} 月んとくハ文字のまうしむ

白中りて屋 夕霧ハ大雲此線な

まハ茶うしりハ決りりよやこり

不葉しりありし 後成勝のま

のしとて城よりてよありりや

風吹峯乃木の葉乃目しうて

まうくしりゆく家味れ

あゝ同を味れと 保氏し権多ふ久

まうまにりて又あま例のけさる

又やこりてい又と内はかくし

あまのりりこれあまれりりり又

りまハ女らこのろもの能くも

せまひりりりまどこのねとめし

とまうたのねとハ其ねとま

又音の道すりりり

空の糸ありき 是を版者用久

りりりありハ 神ありりりりりり

まう神元つりりりりりり

大内山とありありりりりり

何事の依ありむ多んハ大内の子なり
ちの正廬大内ありて是と云る所へ
三云云の院仁和寺の大内中より西
ふねりたる中御前兼捕執使
よりして白雲丸を以て奉り給へ大
内山とていひたりと云る事
ありしと源氏の御方より
ありしと源氏の御方より又云
ぬ、源氏君ハ内すものなり
人りて大内山とていひたり
置りたりと云る事あり

美らわうのまきなり

えやハとて 父ありと云る事あり

侍ありと云る事あり

い平引と云る事あり

何事ハ侍と見ゆなりハ

ちのこの跡ありと云る事あり

人しと云るとハ権なき事あり

源氏よつと云る事あり

はハと云る事あり

り跡ありと云る事あり

ありと云る事あり

月ぬりしきりぬるくくくくく

雲くくくくくくくくくくくくくく

りくくくくく

くくくくく 月けきくくくくく

て難をハきくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくく

火くくくくくくくくくく いくく

めくくくくく

あこの 何このハ物くくくくく

くくくくく 萱草父ハ柑子父くく

あくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくく

わくくくくくくくくくくく

いんく

すくくくくくくく いくく

くくくくく十九日くくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

やういふうらなひ

たけのこはまき人ぞ ちよき徳あり

女房さくらりおぼえとておん中跡

のぬまふりてし

りこのさくらちか人しの 徳氏のち蒼き

由いしゆゆりてそのさし ちよき

蒼の上よこいこち由いのもくあ

とあひあひの事とのけし

中しとハりあ跡ぬのこて

蒼このせをせしりハ由断のく

とぬしとぬしとぬし

まじきこのじりきくらうま

蒼のくもをせし徳氏之おのり

ハと蟬のめけきりかきと月

やうりりやうり

ありき枕古舎 飛鳥蒼丸冷霜花重

翡翠舎寒誰與共長根弄唐女

ハ多分ぬは旧枕古舎と有女を侍しや

舎ハ多知りぬ舎とて云屋角

りり中室ありとてり此とあり

りつとまうりて出さき ちよき

ワくくまうりてりり床し移ん若れ

やうなうしとあり

霜乃をうり　　よりとありはうりし書

くちまうしとありありありあり

ひろ冠のむりくし　　上の調子振ありとあり

の中し田んさうあてりしとありし時の

むりしとあり

言しはゆんとせはく　　ちまうりた村

の月形あまうり

殿はたけのゆりやうし

た村乃と集しはゆりしとありし人

しとありしとありしとありしとありし

と人むりや

中まのゆり　　友意のゆりしり

あつとあり　　引舟とあり

くちまうしとあり　　い調子とあり

のりしとあり

じまん乃うしのゆり　　む文袍が夏穀冬

平縮色帯袍　　冠をむ文巻編

服者のむ文巻からしとあり

りしとあり

原氏のゆりしとありしとありしとあり

あまうしとありしとありしとありしとあり

ふらまのし人こころ廣くはまなり
井上とすぬら祈りや
市川とせくさてまらりて

服衣とくめりり屋

夜への市川りらひ 四月朔日夏

のらとせくさりんと夜へのし
又十月朔日冬乃しやうそくりな
とくさくいあま

よりしとせくさりて

二番院かふあら東のぬいりり
しうらむすこりしとぬまきりや

中将君といふしけり形はなり

とせくさりりりぬいりてぬあ
とせくさぬまきり

琴うらぬんつと へんはとぬ何篇

の字かぐさ書の中しとやく見
けりぬと勝負とすりや

とせくさりりりぬいりてぬあ
とせくさりりりぬいりてぬあ

君ハ海りぬとて 源氏の家市方へり

市硯あげて人けり 法正りりりり
入てせぬハとせくさりりりり

しむらひらきびらきとくふらなり

あはれいりやいひじり じふのう

ちりりさうろちりや

あはれき 新枕のこころめなら

ののりたのめさる

くはれいさくき日なり ちりりめさる

ちりりめさるりり

日えりして 是を惟光そり今し

こころめさるいさくき日このめさる

とまひてすなり

糸のこはくはり 亥乃日七世目

申し進ハくりし事

ふりうこてきあらん

三歎一とて

とむ候あらしき

此候三ヶち申乃一りり

嫁娶乃三日しあめり承餅と枕

ふとくあハ先ハうぬりり人

死を治し世信ハ先餅と信す

りありまうはくきりり

かきりりりりりハ女の習は

ふめりりりりハニハ父母の

はまきりりりハ借老同穴の

あしりりりりりりりりりり

帰のまきりりりりりりりり

あしりりりりりりりりりり

色は并し男はりりりりりり

りり嫁娶の白白衣裳りりり

はれりりりりりりりりりり

ふりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり

じりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり

湖をりりりりりりりりりり

らゝのうへ八十ぬより終し屋
入つて 掲架 巾衣架

善き止のりとも ありあつてよく
うらひはるせの善きなり
うらひはるせ

祝志の終り





